



大方あかつき館報

第41号
2024年11月発行

あかつき

《企画展》

第49回「わが母校中村高校」〜第49回選抜高校野球の思い出〜

会期：4月27日（日）〜6月5日（日） 協力：高知県立中村高等学校

第50回「太宰治展」第50回記念企画

会期：7月20日（火）〜8月28日（水） 協力：青森県近代文学館

第51回「仲秋に上林を奏でる」バイオリンとチェロの二重奏

日時：10月14日（金）14時〜16時 演奏：加藤えりな（バイオリン）
演奏：マルモ・ササキ（チェロ）

朗読：山沖素子（顕彰会会員）

第52回「枯れ木のある風景」宇野浩二と上林暁

会期：11月8日（金）〜12月18日（水） 開催中

《文学講座》

第1回「伝わる言葉」くらんまんの土佐

日時：4月8日（土）14時〜16時 講師：西村雄正（俳優）

第2回「わが母校中村高校」〜第49回選抜高校野球大会〜さてその真相は

日時：6月2日（日）14時〜16時 講師：山沖之彦（投手）

講師：市川幸輝（監督）

講師：田頭克文（主将、二塁手）

講師：小松孝年（補欠、三塁手）

朗読：山沖幸喜（上林暁顕彰会長）

第3回「宇野浩二「枯れ木のある風景」文壇復帰と上林暁

日時：10月20日（日）14時〜16時 講師：増田周子（関西大学文学部教授）

《共催事業》

第16回 上林暁忌短歌大会

日時：8月4日（日）9時〜16時

記念講演：「寄り添う言葉」講師：永田和宏（歌人・細胞生物学者）

第49回 企画展
わが母校中村高校
第49回選抜高校野球の思い出

わが母校中村高校

第49回選抜高校野球の思い出



2023年7月、元プロ野球選手の山沖之彦氏が、黒潮町大使に任命されたとき、私は今回の企画を決めた。それは、山沖氏が上林暁の親族にあたることを、何かの機会に紹介したいと思っていたからだ。随筆「わが母校中村高校」は、数多い上林作品の中では最も身近に感じられる作品だ。

と言うのも、昭和52年、中村高校の山沖投手らが活躍した第49回選抜甲子園大会は、私も上林と同じように、一喜一憂の想いでテレビ観戦をしていたからである。

その映像の中に時々映し出される市川監督は、いつも笑顔でいて、我々の心配とは余所にあつたせいか、上林も監督のことは作品にせず、決勝戦で負けた瞬間には、悔しさから思わずテレビのスイッチを切ってしまったと記している。

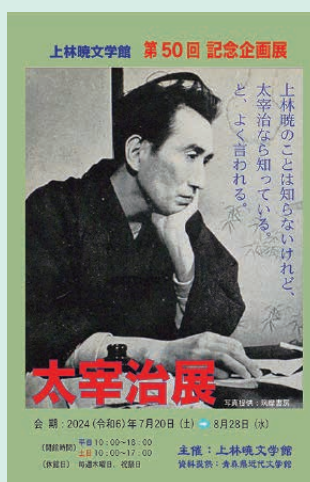
しかし、当時のスポーツ新聞を見れば、各紙がこぞって読者の興味を引こうと市川監督をスター扱いで紹介している。

それは、当時のバラエティー番組に登場していたハナ肇のキャラによるニックネームで紹介され、どの紙面でも注目を集める存在に扱われていた。それはそれで、意に介さず楽しいところもあった。

中村高校は、上林が生まれる2年前に創立された歴史のある学校で、親族の一人の山沖氏が、中村の町を全国的に宣伝したこの選抜高校野球大会は、上林が逝く3年前のことであり、その後、山沖氏がプロ野球選手になった時にも、おそらく、上林は作品に残したであろうが、逝去された後であったから残念でならない。

今回の企画展に際し、県立中村高等学校の校長先生をはじめ、選抜高校野球に出場された方々には、多大なご協力を賜り、厚くお礼を申し上げます。

第50回 企画展
太宰治展
第50回記念企画



上林暁文学館の企画展は、1998年4月に第1回を開催し、足掛け27年の歳月を経て今年第50回を迎えた。その節目を記念し、今回は、阿佐ヶ谷会の作家仲間の中でも比較的知名度の高い太宰治を選んだ。では、どの程度の知名度かというところ、いつ、どこで、だれに何とも、まずこう返される。

「上林は知らないけれど、太宰なら知っている。」私の主治医もそのひとりなのだが、今回の展示は彼の病院での会話がきっかけだ。

「上林暁に文学館なんて要らないよ。無駄だよ。」と、館長を目前にしても、堂々と持論を述べられるので、最初は気分を害したが、その怒りもやがて憐れめというか、失礼な言い方ではあるが、不憫に思うようになった。

「太宰治と言えば、走れメロスだ。」と豪語されるので、「人間失格」ですと冗談ぽく返したら、気分を害された。このやりとりを聞いていた看護師が微笑した。

「何がおかしいんだ？」と主治医。グッド・バイと私が帰り挨拶すると、看護師は爆笑した。

それ以降の受診から、この文学少女の看護師は、「先生、上林さんがお見えです」と紹介してくれ、その都度、主治医は苦虫を噛み潰したような顔になる。

慢性疾患を持つ私だが、通院が楽しくなった。今回の展示では、青森県近代文学館様のご協力により、太宰治の資料を数多く展示できたことで、来館者の皆さんからは好評を得ることができた。

その来館者名簿の中に主治医の氏名が無かったことは少し残念だったが、文学少女には私の想いが届いたようだ。

第51回 企画展

仲秋に上林曉を奏でる ヴァイオリンとチェロの二重奏



ヴァイオリンと チェロの二重奏

2024.10/14 (月・祝日)
13:30 開場 14:00 開演
大分あかつき劇場チャーターホール
(TEL.0880-43-2110)

「薔薇盗人」は、上林曉のデビュー作であることから、小説集『薔薇盗人』の復刻版は、大方あかつき館の開館に合わせて1998年3月に発行した。開館以来、この『薔薇盗人』を館内で販売している。

しかし、時代の移り変わりや通信機器の発展などの

影響もあってか、ここ数年は本を求める人の数は減ってきて、上林曉のデビュー作としての認識も薄くなりつつある。そこで、上林曉文学館としても、上林文学の振興のため、企画展や文学講座など開催しながら、文化振興に努めているところではあるが、限られた予算での良い企画が立てられず、上林ファンをはじめ、来館者にはご迷惑をお掛けしているのが現状だ。

また、前館長の時代から始めた、上林曉作品の映画化についても、5年前の始まりの頃には、町内外での署名活動も活発に行われ、一定の盛り上がりを見せていたものの、館長が変わると同時に、新型コロナウイルスが蔓延し、集会はもとより、人と人との繋がりに制限がかかって、かつて経験したことのない生活様式を求められるようになり、健全な日常生活を送ることすら困難になった。

こうした社会情勢にあった3年前は、加藤えりな氏をお迎えして、上林作品の「マズルカ」をテーマにして、ヴァイオリンとピアノとのデュオで演奏会を開催した。

コロナ感染の拡大が危惧される中での開催であったため、入場制限をかけた演奏会であったが、客席はほぼ満席になったことから、地域の方々のクラシック音楽への関心の高さが明らかになった。

もっとも、入場無料であるので、一概に全てを肯定できるものではないにしても、振興策の手段としては、大きな力であることが実感された。

そこで今回の演奏会だが、企画するとき、チェロの音と合わせて上林作品を聞きたい、聞かせたいという衝動に駆られ、友人である加藤えりな氏に、このことが心安くご相談のできるチェリストを探していたが、朗読者は、「上林曉作品を読む会」で朗読をされている山沖素子さんをお願いし実現した。

リハーサルは、演奏会の当日になったが、朗読者のマイク音量がチェロの生音量に負けてしまう現実があって、ステージ上のチェリストの位置決定に多くの時間が費やされた。これは、企画者が、とても貴重な体験であったが、やはり、本番でもチェロの大音量が欲しいと感じたことから、お客様にも聞き苦しい点があったかと思われる。ただ、後半には、チェリストが気を効かされ、音量の制限をされたところには、プロ意識が感じられ安堵した。

生演奏に合わせての朗読会は、簡単に出来ると思ったが大変なことであった。



山沖素子さん(朗読)とマルモ・ササキさん(チェロ)

第52回 企画展

枯れ木のある風景 宇野浩二と上林曉

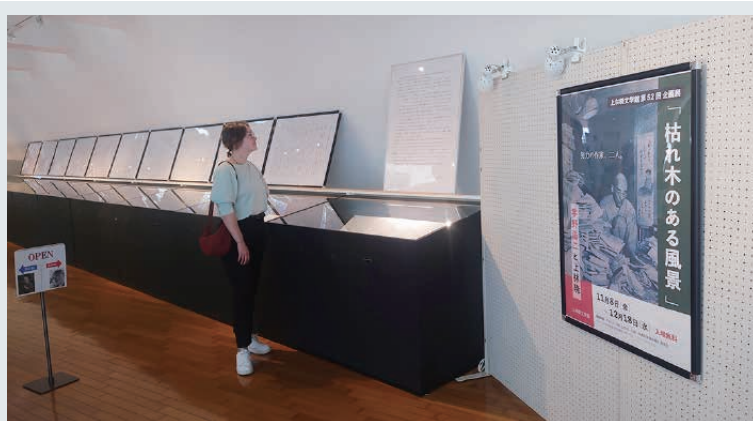
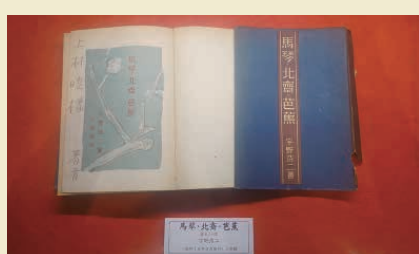
上林が、宇野浩二に初めて会ったのは、昭和二年、大学を卒業後改造社に入社し、記者になって間もない頃、編集長から紹介された時である。

上林は、その時のことを、随筆「枯れ木のある風景まで」の中で、「宇野浩二という作家は、もみあげが長く、鼻下にちよび髭を蓄えていた。寝床に腹這って原稿を書き、三味線を引くという風変わりな人だ」と記述しており、この日から上林は、宇野浩二の係になるのだが、程なくして、宇野は病気になるのである。

上林が最初に出した本は、「薔薇盗人」である。上林曉こと徳廣厳城は、改造社では禁止されていた執筆活動を入社以来続けていて、昭和七年「薔薇盗人」を発表した。この時、川端康成からは、「古い真実よりも、新しい嘘が良い」と褒められたことは、上林ファンなら周知のところであるが、この翌年発売した創作集「薔薇盗人」を宇野浩二に贈呈したところ、宇野は、編集者の徳廣厳城が小説を書いていくことの驚きとその喜びを、速達便で伝えている。

そんな年の暮、今度は宇野浩二が突然、徳廣厳城に電話をかけ、小説ができたから取りに来てくれと伝えた。その作品が、「枯れ木のある風景」である。

これは、宇野浩二の病後の第一作であるが、上林にとっては、初めて宇野を訪ねてから、六年の歳月を費やし、待ち続けた大作でもあり、上林はほとんど嬉しかったのである。自身の随筆にも、この作品ができるまでの経緯を多く残している。



宇野浩二全集について

上林 曉

宇野浩二さんが死んで、もう宇野さんみたいな人がいないと知って、淋しい気持ちがある。宇野さんみたいな人と言うのは、すなわち、「文学の鬼」と言われる人のことである。言うことが、なすことが、すべて文学に係わりある人間である。それは、文学に憑かれているから、初期のものは、流れるようによどみなく書かれていたし、後期のものは、渋滞したのである。

そうして、泣き笑うような、宇野さんらしい作品を次々に書いた。一度読んだ作品はまた繰り返し読みたくなる。まだ読んでいない作品は読みたくなって仕様がな。この宇野浩二全集には、そういう作品が一杯ある。

(上林曉全集第十九巻所収)

第1回文学講座

伝わる言葉

らんまんの土佐



第一回文学講座は、映画「あらうんど四万十カルニカーラン」(2015年封切)で主演を務められた、西村雄正さんをお迎えして、「伝わる言葉」らんまんの土佐」と題して講演をいただいた。映画「あらうんど四万十」が封切られた時、スクリーンには、四万十市や黒潮町の普段見慣れた場所がたくさん登場し、映し出されるその景色にばかり目が行き、意地悪な見方だが、次の場面へは瞬時に移動ができない場所が映し出されたりして、肝心の物語には着いていけなかったことが思われる。

また、映画の中で使われる方言「幅多弁」もおそらく自分たちも普段、そのように発声しているのだからけれど、いざ聞いてみると、少しだけ違和感を感じながら、妙に恥ずかしく観ていたことだ。

さて、連続テレビ小説「らんまん」は、土佐弁が使われるドラマである。その言葉指導に当たられた西村さんからは、「高知が舞台のドラマがはじまると、なんとなく気が進まない、またあの変な土佐弁を聞かされるのかと思うと嫌になる」と言われることが多いので、らんまんでは、そんなふうには思われないように工夫した、と話された。「伝わる言葉」として、朝から聞きやすい「自然な土佐弁」を研究し、役者さんたちへの指導に当たられた取り組みを、ユーモラスに紹介された。

今回の講演は、知人を通じてご依頼したが、このような講演は、はじめてのことです。最初はテーブルの上に腕時計を置いて、時間を管理をしながら講話されていたが、話が進み、指導を受けられ



た役者さんたちの奮闘ぶりを楽しみ話されているうちに、講演時間はあっという間に過ぎて、あらかじめ、用意していた質問時間は、やや遅れて始まり会場内のお客様と一体となって応答が続いて、楽しい時間を過ごすことができた。次に予定されている、高知が舞台の連続テレビ小説「あんぱん」でも、雄正流の楽しい言葉指導に当たられるのであろうか。



大きなカンペを見せて、言葉指導をされる西村雄正さん

第2回文学講座

わが母校中村高校

第49回選抜高校野球大会真相は？



進み過ぎ、会場から笑いのエールが送られると、メンバーの緊張感も取れた。さすが監督だ。リードが上手い。その後は、勝ち進む試合の流れに沿って進んで行き、テレビでは見ることも出来なかった「真相」などが紹介され、会場内は笑いと驚きの賑わいがあった。

甲子園大会を経験された皆さんの、その後の生活はどう変わったのだろうか。後述には、上林のご遺族と親類筋からいただいたメッセージを掲載しておく。

中村高校が甲子園で準優勝したとき、私は小学校高学年でした。高知県の代表校をいつも鼻息していましたから、中村高校が家族と関係の深い学校なので、いっそう応援にも力が入りました。決勝戦は、友人の家のテレビで観たと記憶しています。

祖父が、中村高校の活躍を随筆に書いていたことを知ったのは、のちのことです。決勝戦で負けたのが悔しくて表彰式を見なかったというのは祖父らしく、読むたびに微笑んでしまいます。

チームのメンバーや卒業生のみならず、地域の方々にもこの準優勝が思い入れの出となっていることでしょう。

因みに、中村高校にある「文芸は私の一芸二の芸三の芸である」という祖父の文学碑を見るため、私は何度も中村高校を訪れております。

大熊平城(上林院の孫)

中村高校のことを想うと、為松公園の桜と四万十川、甲子園大会が思い出されてくる。

1977年、貧し切り観光バスで皆さんと一緒に叔父や叔母も甲子園球場へ野球部の応援にやって来るといふ知らせがあった。

当時、神戸赤十字病院勤務だった私も、夜勤明けで駆け付けた。グラウンドに立つ選手たちを見た時には思わず涙が出た。あの歓声と熱気の甲子園球場を、選手たちから、何事にも変え難い奮い立つような純粋な力と勇気をもらった大会。今でも全身で覚えている。

上林院

佐野美幸(上林院の従妹の子)

1972(昭和47)年、中村高校卒業

染織家 日本工芸会正会員、日本工芸会近畿支部幹事

京都府在住

進行は、編者の担当であったが、全員が集合できたのは、当日開演の20分前。慌ただしく、簡素な進行表を各自に渡し、ぶつつけ本番で開始した。開演早々、市川監督のオーバーランで、進行が

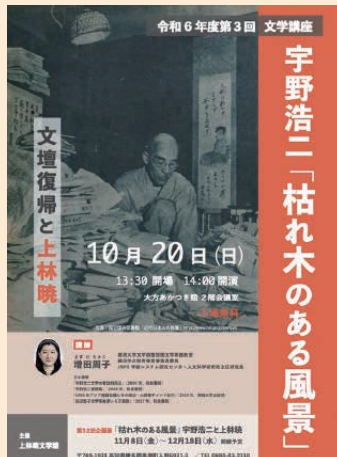


第3回文学講座

宇野浩二

『枯れ木のある風景』

文壇復帰と上林 曉



講演を行う増田周子先生

「宇野浩二の事といえば増田周子。」というのが我が国の文芸界での常識となっている。この回は、今回の企画展「宇野浩二『枯れ木のある風景』」のために、昨年から資料収集をはじめ、東京神田の行き付けの古書店に依頼するも、「宇野浩二は増田周子なのだ」と門前払い、私のような素人が、俄かに行動を起こしても、手出しは出来ず、何にも集めることができなかった。

したがって、上林 曉の蔵書と生原稿など展示資料とした。上林は、改造社時代に宇野浩二との信頼関係を築き上げ、共に作り上げたと言っても過言ではない「枯れ木のある風景」をテーマに、宇野と上林の地味な作家を並べて展示した。

上林の蔵書から宇野浩二の著書を探すと、宇野浩二の署名本も見つかったことから、上林に対する宇野の感謝の念と心の広さを感じ取ることが出来た。

企画展の開催は、増田先生のご講演の後になったが、先生からいただいたテキストを読むと、宇野と上林との良好な関係が見てとれるが、これは上林と太宰との関係にも似ており、胸が熱くなってくる。

テキストに掲載されていた文章を後述する。

◆上林 曉氏の粘りや励ましがなければ、「枯れ木のある風景」という名作は生み出せなかったし、文壇復帰や病氣後の宇野浩二の活躍はなかったと言えてよい。

◆宇野浩二は、『枯れ木のある風景』後、川端康成、井伏鱒二らの新進作家らとともに文藝復興の動きにも力を尽くし、復刊『文学界』（昭和8年）にも協力する。

◆これら、宇野浩二のその後、昭和36年までの様々な文学活動を見ると、宇野にとって上林 曉はなくてはならない方であり、編集者としても作家としても有能な人物であったと言える。

この上ない褒め言葉である。

第16回上林 曉忌短歌大会

講演 「寄り添う言葉」 永田和宏氏 (徳島大学文学部教授、著者)

令和6年8月4日(日) 大方あかつき館 レクチャーホール

12:00 受付開始 13:00 開会行事・講演(休憩)

14:00 朗読 15:40 投票 16:00 開会 16:30-18:30 懇親会(もちろん)

※会費1,000円(当日受付にてお申し込み可)

参加費 一般 1,500円(自由席、全席自由席) 高知市立図書館利用(ご希望ください) (他の参加費は別) 高知市立図書館利用(ご希望ください) (他の参加費は別) 高知市立図書館利用(ご希望ください) (他の参加費は別)

朗読 永田和宏氏(徳島大学文学部教授、著者) 高知市立図書館利用(ご希望ください) (他の参加費は別) 高知市立図書館利用(ご希望ください) (他の参加費は別)

投票 1,000円(自由席、全席自由席) 高知市立図書館利用(ご希望ください) (他の参加費は別) 高知市立図書館利用(ご希望ください) (他の参加費は別)

開会 1,000円(自由席、全席自由席) 高知市立図書館利用(ご希望ください) (他の参加費は別) 高知市立図書館利用(ご希望ください) (他の参加費は別)

主催: 上林 曉研究会・上林 曉文学館・大方あかつき館

第16回上林 曉忌短歌大会は、84首の応募を得て、令和6年8月4日(日)、上林 曉文学館のレクチャーホールにおいて60名の参加で開催された。

催事では、まず主催者の上林 曉顕彰会長の山沖から来場者の皆さんへ御礼とご挨拶をされ、続いてご来賓の黒潮町長松本敏郎様からご祝辞をいただいた。

記念講演では、撰者の永田和宏先生から「寄り添う言葉」と題してご講演をいただいた。講演の中では、永田先生と奥様の馴れ初めを、歌を交えて紹介したり、有名な歌人たちの作品には、数々のエピソードを添えてユーモラスに紹介され、場内では笑いあり、泣きありで終始なごやかなムードに包まれていた。

講演のあとには、短歌大会の入賞者発表とその講評に移った。

講評では、ご来場された方々の作品ひとつひとつに鋭い指摘や感想などをいただいたが、この講評を熱心に聞いている作者らをそばで見ていると、その勤勉な様子が、まるで学校の授業のようにも見え、次なる発表の機会への熱意が、素人の編者にも伝わってきた。

これは、この大会が成功した証であり、上林もさぞかし喜んでいらっしゃるだろう。

下記に入賞作品と受賞者を掲載する。

次大会は、2026(令和8)年を予定している。



講演を行う永田和宏先生

地下を出で駅頭に見る春北斗柄を比叡山山頂に置く

須崎市 徳永逸夫

Aーの音声ガザのニュース告ぐそびらの寒き水無月まひる

高知市 依光ゆかり

ゆつくりとサーファーがゆき漁船一艘すべりくるなり梅雨の晴れ間を

中土佐町 黒岩やよえ

初鯉の旨きを言へば釜石の魚が一番と歌人雁部氏

高知市 中山恭子

挨拶をしても返さぬ遍路をば終日想ひ夏の草引く

土佐清水市 山下昭文

抹茶オレの二層混ざりてのぼりゆく君の口の細いトンネル

四万十市 今城久枝

ひとしづくテストステロン残りしか薔薇のかほりのあとを目で追ふ

高知市 小谷一

ぬくもりの去り行く姫ちゃんさすりつたんで道路に行つたのとときく

四万十市 谷 恵子

わが胸をボンとたたいてつれあいにこの人だあれ朝の食卓

土佐清水市 福富奈加子

遠からず笹ヶ谷川となる水に魚が影引き水草に消ゆ

山口県 井ノ口皓

この寂しさ分らないよと言ひ孫嫁ぎて行けりつゆ晴れの朝

四万十市 小野亜洲子

呼ぶ声の聞こえたようなゆうまぐれ木末に淡きトネリコの花

黒潮町 谷脇 巴

ふる里の「ちゃん」で呼び合ふ幼な友と輪に踊る盂蘭盆の夜

愛媛県 井上由美子

合歓のはな雨中に紅き幾ひらの落ちてゐる道けふ「慰霊の日」

高知市 梶田順子

持ち主の戻れぬ部屋の白くまをフーラーもなき部屋に招かん

愛媛県 松田洋子